



【サンプル号】 霊能研究室
恐怖体験 怪談



伊勢むく



実に驚くべき話であるが、僕の実母は5年前に他界している。
その実母の告別式に見ることができたお化けの話を述べよう。

若き日の同人活動（二次創作）で、母には電話の取り次ぎなどで世話になった記憶も読者の皆さまにはあると思う。僕もアトリエ形式の一人暮らしを始めてから20年ほどになり、そういったこともすでになくなって久しいが没したのは本当のことである。

現在でも電話のことはよく言われる。家人が出ることは無い。
家族葬で新聞にお悔やみを掲載しなかったのが、母の死がいまだに信じられないのであろう。
ニコニコしながら母が対応してくださったことを忘れることは無い。

人のテレパシーは、死して後にも残り存在する。
僕の霊能研究では「戒名」と「墓石」が必要である。霊界で修行した後に守護霊になるのだ。
母の戒名は、教育関係者の戒名になった。喪主の意向である。
家族葬は故人のたつての希望で本当にしんみりと行われるはずだった・・・が

いざ告別式が始まって見ると、父方の親戚、母方の親戚、僕の職場の上司まで参列し大人数になった。
職場に提出した式場の案内を見て、来てくださったのだ。
家族は、父と兄と姉、そして僕であった。
僕の職場の花輪まで上がり驚いた。僕は一人前の大人の男性だ。
バカみたいに嘆き悲しむことはなかった。

黒い喪服に身を包みながらこれからのことを考えた。
僕の苗字は、どうも身体が異常に強靱。お嫁さんはいつもついてこられない。
父方の祖母も若いうちに他界している。
父方の祖母はかなりの美人だったようだ。東京に起業家で上京した祖父が母の郷里まで来てしまった。
父も東京生まれの東京育ちで、やはりどこか垢抜けている。
子供だった父が、当時若かった母に

「いつ東京に帰るの？」

そう何度も聞いて、大人になった後の父は、母（父方の祖母）を困らせてしまったと悔やんでいた。
僕も高校受験の際に、東京の大学に進学予定で高等学校から東京に進学するように周囲から言われた。

父方の親戚のお嫁さんと、母方の親戚の顔を見るといかにも先祖伝来栃木にいる顔立ちをしている。僕は見慣れた顔貌を見て少しだけホッとした。
僕は、栃木の人間では無い。

ん？

僕は家人と祭壇の前に立っていた。

参列者は学校の生徒のように椅子に座ってうなだれている。

その奥に扉が開いた入り口が見える。

その入り口からロビーが見えるのだが・・・

タツと走って入ってくる人影が見える。

平服、腰にウェストポーチをしている。髪の毛は白髪で真っ白だった。

メガネはしていない。裸眼だ。

小柄な男性だった。

気になり横に並んでいた家人を見る。やはり父と姉が僕と同じように入り口を凝視していた。

やはり僕と同じように男性の人影を見ているようだった。

平服であったので奇妙に思った。

人影はキョロキョロと周りを忙しげに見回し何かを探しているようであった。

カッと目が見開き、白目が血走っている。

タツと受付の方に走っていき、視界から消えた。

そのままどこにもいないようになってしまった。

参列者は入り口を背にして座っているので何も見えていなかった。

何事もなかったかのように音楽が流れ式典は終わった。

僕は伊勢神宮に向かい、特急に乗っている。

僕の数少ない霊能研究で、あの告別式の男性の人影を理解し
人生の作り直しのために、伊勢市に向かう。

僕は、子供の時から霊能力がある。

霊能力者からは、「生きている守護霊」ぐらいであると言われていた。

本来ならば、未通（童貞）のうちに寿命が尽き、あっという間に守護霊だそうだった。

しかしながら僕も人生ですることがあり、生き残り、漫画の仕事をすることにした。

守護霊ではなく、神様のお仕事をすることにしたのだ。

生きているうちに「神様」とは摩訶不思議だが、現実である。

僕の霊能力と精神力は、肉体が滅しても継続して続く。残り会話も可能だ。

お墓がなくても残るのである。

僕は人生の帰路に向かった。

本来であれば、死んでいるはずの守護霊（？）と、お化け。

お化けの彼は僕の幼馴染である。

いつも少年の姿でお化けで現れる。人生が尽きてしまうはずの僕。その僕の婚約者だ。

生き霊となり様々な怨霊騒ぎを起こしていた。

恐ろしい精神力。

僕が未通であると知らないのに、死人が出るほどの騒ぎだ。毎度のことである。

深く暗い箱の中に閉じ込められていた。

暗い、そう。とても暗い。

僕は交通事故で意識不明の20分間に、彼の咆哮を聞いた。

獣の咆哮であった。

普通であれば即死であった。しかしながら前述の強靱な身体能力で無傷で生還。

仕事と割り切り伊勢神宮に向かう。

仕事だ。

．．．．．ここで、念のため記載する。

この物語は全て現実の記載で、作り話ではない。

子供の時から大人になってまで、世の中は不思議に満ちている。

僕ですらいまだにお化けを観る。

実に恐ろしい。

伊勢神宮参りの話は、第2話以降で述べるとして、やはり1話目はお化けについて記載しよう。

僕には子供の頃から、男性のお化けが一人いる。

年齢はいつもまちまちであるが（若かったり老人だったり前後している）、同じ人物である。

初めのうちは、僕の周りの人たちが「お化けが出た」と大騒ぎしていたが僕には何も見えなかった。本当に誰もいないのだ。

しかしながら35歳を境目にしてついに僕にも視え始めた。あまりにも鮮明に視えるので流石の僕もびっくりした。本当に生きている人間となんら変わらないのだ。話もする。

周りの記憶する一番古い出現は、僕が中学生の頃だった。

僕が通学している田舎の中学校の、音楽室とテニスコートに出現したのだ。

なんと、全裸の男性であったそうだ。

裸の中年の男性が全裸で全力疾走してこちらへ向かってものすごいスピードで来たという。

もちろん僕も同じ場にみんなといたのだが、全く観えなかった。みんなが悲鳴とともに恐怖に引きつった顔で走り逃げ出す。僕は何があったのかわからずポカ?んと立っていた。

あとで霊能関係に詳しく話をいただくと、俗にいう「町仲」。

学位取得をしないで結婚（性交渉）をするとテレパシーで視えるという。市町村別で塊で発生する町仲、戸主である。僕は童貞のまま学位取得をしたので町仲にいないということだ。

町全体が親戚で、肉親のテレパシーによる共同幻想らしい。

兎にも角にも、確かに男性がその場にいた僕以外の全員に見えたのだ。

さらに、驚くべきお化けが僕に現れた。

32歳のときであった。

就寝して布団の中でぐっすり眠っているときに、ふと目が覚めた。

いつもは朝まで目が覚めない。どうも様子がおかしいぞと思い薄眼を開けて見る。

目の前に老人の顔が視える。男性だ。メガネをかけている。ちょっと頭が剥げていた。

どうも僕を相手に性交渉をしているようであった。

あまり気にしないでそっと目を閉じて就寝した。

．．．．．僕はこのお化けを「あのお方」と名付けた。以降度々現れるようになった。

・・・そして現在であるが、やはり白昼堂々出現する。

顕著な例は、真昼間の総合デパートでのお化けの出現であった。
僕は買い物を終え、ちょっと用足しにトイレに行きその帰りであった。

「ちょっと。」

ん？声をかけられ相手を見ると中学生ほどの可愛らしい少年だ。
メガネをかけている。
知らない顔なので返事をせずにじっと眼差しを見つめると、おもむろに少年が

「どうやったら転勤をできるのですか？」

と僕に質問して来た。そしてこちらへ・・・、とトイレを指差す。
おいおい（爆笑）。職場の嬢婦かよ??。
つまりこの場で性交渉をしてテレパシーを繋ごうとしたのである。
僕は返事をせずにその場を早々に退散した。

確かに生きている人間に見える。
僕はこの少年のお化けは童貞の総合職だと思う。
普通であったら「生き霊」であるが、神様。

永い付き合いになりそうだ。

たとえ肉体は滅びても、神様ではテレパシーはそのまま継続して永遠に残る。
切磋琢磨して僕は勉強に励むことになった。
もちろん童貞のままだ。

（第2話に続く）

【サンプル号】 霊能研究室恐怖体験 怪談

<http://p.booklog.jp/book/121318>

著者：伊勢むく

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mukuisse2/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/121318>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト